

アメリカにおける外国語研修

はじめに

第2次大戦に先立ち、アメリカは戦略的に重要な言語能力の蓄積の意味から、日本語、ロシア語、中国語などの言語の短期習得の必要にせまられた。アメリカ語学会評議会 (American Council of Learned Societies—人文科学の発達および各種学界間の関係の維持向上を目的として1919年に創設された協議会) は、これらの言語のエキスパートがきわめて少ないのを知り、言語学者を動員して戦略的な言語の分析にあたらせ、さらにこれを教える具体的な計画にとりかかった。

分析の結果、言語学者は次のような結論に達した。すなわち言語分析の正しい訓練を受けた者はまったく未知の言語に接しても、その言語の構造を非常に明確にまた正確に把握することができ、そして言語を教える最良の方法は教師の仕事と informant の仕事をわけることにあり、教師は学習課程全体の進度について責任をもち、進度に応じて文法的分析を示すのを本務とし、informant は学習者に発音の手本を示し会話上達の指導者となることに専念する、ということであった。

この種の教育方法は通常の大学の語学コースよりも多くの時間数を与えられるところから、集中的コース (intensive course) と呼ばれた。

諸学会評議会のこのような計画は ACLS の集中的語学教育計画 (Intensive Language program) として一般に知られるようになった。アメリカが戦争に入った時、軍には特にその戦略的意味から外国語の短期習得の必要があった。そして軍はこの ACLS の語学計画に注目し、その蓄積力を利用することができたのである。

1942年、軍は少数の将校に対する外国語教育を実施した。そこに諸学会評議会との協力が芽ばえ、さらにこの計画を発展させるために「言語と地域の研究」(language and area studies) の一環として、「陸軍各科専門教育計画」(Army Specialized Training Program, 一般に ASTP と称せられる) が実施された。

ここに、戦前から言語学者が実際の外国語教育に応用

しようとした原理を汲みいれた「集中的教授法」(intensive method) が登場した。当初この種の計画は、軍のみでは処理できなかったもので、当然各大学の機能にたよるざるをえなかった。その実施条件も非常に厳格であったので、これに応じられる学校は10校ぐらいしかないと考えられたが、計画が拡大するにつれ100を越える大学の機能が活用された。

ASTP が各大学にコースの設置を依頼する際の指示事項は次のとおりである。

- (1) 比較的短期間内に、多くの授業時間を設けること。
- (2) 1学級内の学生数を少なくすること。
- (3) 言語構造についての説明と、会話練習とを程よくあなばいすること。
- (4) 反復練習を重視して、言語習慣を形成するよう強調すること。
- (5) 音素分析および音素表記を用いること。
- (6) その言語を話す informant を使うこと。
- (7) 会話体国語を自由に使いこなすことを主たる目標とすること。

これをみるとわかるようにその主眼点はあくまでも聞くこと、話すことにあり、これが完全に自分のものとなったとき、その基礎のうえに読み方を習い始めるという課程がとられている。話し方を学べば読み方の能力は自然に具わるという考え方である。ここに従来の「読み方本位教授法」(reading method) に代わる新しい教授法がはなばなしく登場した。

I アメリカ陸軍語学校

このようにして軍は各大学に教育を委ねて、その機能を活用する一方、独自の機関を設立し、外国語教育にあたっていた。現在カリフォルニア州モンタレーにあるアメリカ陸軍語学校 (U. S. Army Language School) がその名ごりである。

1941年12月8日対日戦争が開始されようとする緊迫した状況にあって、軍の少数の将校グループは情報部隊の重要性を認識していた。そしてその任務遂行のためにも

どうしても日本語の知識が必要であった。かくして秘密裡に1941年11月1日、サンフランシスコに第4陸軍情報学校(The Fourth Army Intelligence School)が生まれた。これが現在の陸軍語学校の前身である。

日本語を知っている白人が少ないために、必然的にこの分野の活動は短期間の訓練で日本語を習得できる利点をもった2世にむけられた。しかしながら厳重なる適性検査の結果、十分に言葉を駆使できる者はごくわずかであったので、さらに機能を拡充する必要があった。

まず2人の軍人と2人の民間の教師が課目を設定し、テキストを作成した。学校が開校した時は、5人の教師を含む13人のスタッフがそろった。58人の2世と2人の白人が最初の生徒であった。そのうちコースを修了した35人の生徒は太平洋地域に配属され、日本軍の暗号をとらえ、それを解説する任務にあたった。フィリピン沖の海戦における勝利はかれらに負うところ大であった。

戦争が終了しても軍ならびに政府機関は外国語に通じた人間養成の重要性を認め、この機関を恒久的に存続することに決定し、名称も陸軍語学校と改めた。

日本語から出発しわずか4人の教師で始められたこの学校も、現在では30数カ国語の教育が可能であり、その間500人ばかりの教師が雇われている。かれらの多くはアメリカや外国で教師としての経験を有する有能な人々であり、なかには経験のない人も含まれているがそのような教師も教師としての集中的訓練を与えることにより短期間のうちに技術と方法を習得することができる。全教師はその言語を話す国に生まれた本国人または現地に生まれその国の言葉を第1外国語として話すアメリカ人で構成されている。教師は当然ながら履歴と資格を調査され、自分の声とアクセントを吹きこんで提出しなければならない。このようにきびしい資格審査の上、はじめて教師として認められる。教師は生徒を教育する前にみずから学ばなければならないのである。

1. 教育課程

教育課程と言語はそれぞれの目的によって違うけれども次のようである。

- (1) 47週間コース (Albanian, Arabic, Bulgarian, Chinese-Cantonese, Chinese-Mandarin, Czech, Finnish, Greek, Hungarian, Indonesian, Japanese, Korean, Lithuanian, Persian, Polish, Russian, Serbo-Croatian, Slovene, Thai, Turkish, Ukrainian, Vietnamese.)
- (2) 24週間コース (French, German, Italian, Portuguese, Spanish)

- (3) 74週間コース——特別延長コース——(Chinese-Mandarin, Japanese, Korean)

これらのコースと並行して、その国の地理、経済、歴史、政治の知識も養なう。

特別延長コースに編入される者は通常コースの5カ月の訓練期間に平均以上の能力を示した志願者から選ばれる。そのほかに話しことば(spoken language)を理解しそれを急速に筆記することに重点をおく Special Auditory Comprehension コースがある。

それぞれのコースは(i)発音、(ii)言語構造または文法、(iii)応用の3段階にわけて教育される。第1段階の発音には各コースとも最初の4週間があてられる。この期間に生徒は外国語の sound を模倣することを教えられる。それは簡単な種類の言語表現のための基礎的な語い習得の助けとなり、発音どおりに書かれている言語の sound を自分のものにするよう訓練される。第2段階の言語構造または文法の期間は24週間コースの場合はそのうちの12週間、47週間コースでは20週間、74週間コースでは26週間である。ここでは言語の文法構造を教え、それを日常生活に利用しうることを目的とする。生活に根ざした会話、詳細なる文法の分析、広範囲の説本等が教材として使われる。第3段階の応用では生徒は可能な限り軍隊的環境におかれ、自分の習得した言語の使用を許され、軍隊の任務にそうよう仕向けられる。そして実際に言語を利用する経験をつむために、映画(映画については各国の言語で、最もやさしい言い回しでゆっくりと話すものと、中くらいの話し方と、普通の話し方と3通りのサウンドを作っている)、講義、野外実習、見学旅行等の課外活動が行なわれる。各コースとも授業は毎週4日間で、5日目は練習と試験にあてられる。1日の授業時間数は5時間で、4時間目までは会話と発音についやされ、新しい会話は生徒が宿題として勉強できるように4時間目、または5時間目にだされる。クラスの人数は特別講義とか映画鑑賞を除いては、最大の効果をあげるため8名以内に限定される。

2. 教育の重点

外国語習得は従来学校で行なわれてきたように、ただわりあてられた時間内に漠然と習うということでは完全な習得が不可能であるという立場から、まず語学校の指導者は明確な教育目的を確立することが必要であった。そしてそのような目的に沿ってかれらが採用した教授方法は oral-aural method (speaking and understanding) であった。したがって現地人に近い発音で流ちょうな正

確な会話を進め、通常の状況のもとで現地人を理解することができる能力をつちかうことが本来の目的でありまた最終目標でもある。読み方と書き方は2次的な問題である。その根幹をなすのが発音であることはいうまでもない。まず生徒は音声上の基礎原理、言語に特有な sound を紹介されることによって第1歩が始まる。生徒は教師の発音を真似し、教師のいっていることを正常なるゼスチュアと正確な発音で繰り返えし、繰り返えし練習させられる。正しい言葉の習慣がついた後でも、集中的に sound system を練習させられる。新しい sound の習慣が自然に固まってくると今度は表音記号 (sound symbols) と文字が紹介される。中国語、日本語のような特殊なことは文字が複雑であるから、文字を覚えることが最初に必要となってくる。しかしいかなる場合にも生徒はすでに sound として習得したものを基礎として文字を覚える。このような課程を経たのも、生徒は会話にはいる。会話の主要な対象は日常生活に向けられる。会話は基礎単語を生徒が自由にあやつれるように計画されている。そのために最初10または20の会話のパターンがレコードされており、生徒はこれを徹底的におぼえる。それを助けるために各生徒はレコード・セットとポータブル密音機が与えられる。授業が終わってもかれらはそれを利用して復習できるわけである。さらに各会話に附随する行動の図解描写等がかれらにいつその理解を与える助けとなる。正しい会話の反復練習が終わると、今度はすでに習った語いと言語構造のパターンを用いて、自由に会話があやつれる努力がなされる。さらにニュース放送とか、簡単な逸話を書きとったり、聞いたりすることも行なわれる。この方法は教育内容に変化を与え、生徒の興味をそそるし、ことばの1つ1つがわからなくとも全体の意味を理解する助けとなる。ここでも完全に自分のものとするため反復練習が行なわれる。

最初から教師は自分のクラスの進度について厳重な監督をし、試験によって進度が評価される。生徒の成績は1週間おきに決められる。

3. 器材と設備

陸軍語学校の特色は以上のべた教育方法の他に、充実した教育器材と設備にある。その1つに Sound Record Studio がある。このスタジオでは発音練習、会話、その他語学に関係する材料のテープとレコードを作製することができる。そのために防音装置のついたスタジオやレコード切断機や、同時に20のテープ・レコーダーに吹きこむことのできる設備がそなわっている。新しい設備

で注目すべきものは、高速度テープコピーである。これはそのテープから同時に4つのテープに毎秒5インチの速さで再生することができるものである。他に常に外国語を生徒に親しませるためにラジオ放送がある。これは生徒の言語に対する理解力を増進し、語いをふやすための重要な道具となる。放送は外国放送や新聞雑誌の記事が主体で、あつめられた材料は1時間以内に意識され、翻訳され、編集されそして録音される。

II 大学における外国語教育

この新しい教授法に反対がなかったわけではない。たとえばこれはベルリッツ式教授法 (Berlitz Method—アメリカの外国語教師 M. D. Berlitz によって唱導された外国語教授法。外国語を直接に知覚、思考に連合させること、母国語をぜったいに使用しないことなどを原則とする。かれの影響をうけたいわゆる Berlitz School は世界各地に300もある) であるとか、ジャズ式に調子づいている (jazzed up) とか、全く文法が忘れられているとかいった類いの非難である。

このような非難は従来の「読み方本位教授法」を固執する人々によってなされた (なお1924年から30年にかけて米園およびカナダにおいて Modern Language Studies と称する大規模な世論調査が行なわれたが、その結論は reading method がよいという結果がでた)。

しかし種々の非難そして困難に直面しながらも新教授法はいくつかの大学の語学教育に応用されるにいたった。

たとえば陸軍語学校の正統的流れをくむコーネル大学 (ここでは平時の大学課程に Army Method を採用し、4年制カリキュラムに入学した者は初めの1年の学習の半分を1つの外国語に集中している)、語学器械利用のための特別の建物をもつテキサス大学 (ここでは中央の技術室に各種のテープがそなえてあり、それぞれの教室や、練習室から電話で申しこめば望みの語学テープがただちにそれぞれの部屋に聞えてくる設備がととのっている) などがそれである。そして最も古い伝統をもち外国語教育の分野でもパイオニア的役割をはたしているのが、ジョージタウン大学 (Georgetown University) である。ジョージタウン大学の場合は新しい外国語教育の利点を採用する一方、従来の教育方法をも重視して併用し、語学教育で独自の方向を進んでいるのが特色である。

この大学の外国語教育の歴史は第1次大戦直後に付設

された外事学校 (School of Foreign Service) に始まる。外交官その他国際人の養成を目的として出発したものであるが、1949年さらにこの学校の付属研究所として「言語および言語学研究所」(Institute of Language and Linguistics) が創立されるにいたり本格的に語学教育が始められた。真に他の諸国民との関係を友好的たらしめ理解しあうためには、それらの言語を学ぶことがその基本であるとし、通常の大学課程の中に特に言語部門を組み入れた。一定の単位を修了した者には、Bachelor of Science in Language, または Bachelor of Science in Linguistics の資格を与え、大学院もある。

語学の場合を例にとると、在学期間は4年間で、その間2回ないし3回の夏期学級をうけなければならない場合もある。他の単科大学、総合大学からの転校も許される。すでに学士の資格をもっている転校生は、少なくとも1年間の補習教育の終りに卒業証書を下付するにじゅうぶんな言語能力をもっていなければ、さらに2年間を学費にあてなければならない。さてここで注目しなければならないことは、学士の称号を得るための条件として、専門分野の学問を推しすすめるために1年間の海外留学をしなければならないことである。留学期間中は3カ月に1度レポートを提出し、帰国にあたっては自分の研究に対する試験をうけなければならない。その他に言語科学の分野における一般言語学、音声学、音素学のうちから最低2課目の習得が要求される。

言語教育は集中的または半集中的教育によって行なわれるが、同時に関係言語の背景をなす文化と社会の教育も重視される。最大の効果を期するために各クラスとも10名以内に限定する。コースは大体次のようにわけられる。

(1) Introductory Language Courses

ここでは言語の音声学、文法上の型の紹介に中心がおかれ、コースは言語学者の参加と監督のもとに指導される。学級練習には現地人があたる。語学器械は欠くべからざるものとして全コースに適宜利用される。ほかに特別集中コースがあり、通常1週15時間の授業がある。

(2) Intermediate Language Courses

このコースは上記コース修了の者のみが受けられるもので、話しことばと書きことばの両方を理解する力を養うことを目的とし、oral report と written report, 基礎作文、古典あるいは近代文学から選ばれた読本等が教育材料となる。地域研究ももちろん重要

な一部をなす。

(3) Advanced Language Courses

このコースは自由会話の口頭実習が目的で、会話のさまざまなスタイルの練習、原文スタイルの分析、作文に重点がむけられる。一方古典、現代の作家の作品からの読書選択も行なわれる。さらに印刷されていない原文の聴取、生徒自身の吹き込み等が実験 (Laboratory work) として行なわれる。これは Intermediate Language Courses を修了した者がうけられる。

以上が語学コースであるが、その他に Reading and Translation Courses, Civilization and Area Courses がある。

アジア地域の対象言語としては中国語、日本語が教育されている。コースの時間数は次表のとおりである。

語学名 コース別	日本語		中国語	
	授業時間 (週)	実験時間 (週)	授業時間 (週)	実験時間 (週)
1) Introductory Language Courses	(昼) 8	12	8	12
	(夜) 5	7	6	9
2) Intermediate Language Courses	(昼) 5	7	5	7
	(夜) 同上	同上		
3) Advanced Language Courses	(昼) 3	5	3	5
	(夜)			

(注) 1), 2) は4年制コース, 3) は大学院コース。

その他大学院コースに各専門分野にわかれて日本語を読む Topical Japanese コースがある。

Civilization and Area Courses には次のものがある。

Introduction to the East—中国, 日本, その他極東諸国の文化の概略, 4年制コース。

Chinese Civilization—講義とそれに伴う一般討議や個々の研究は、学生の訓練に関連ある問題にのっとってなされる。中国語選択の生徒は必修課目としてうけなければならない。4年制コース。

Japanese Civilization—同上。

Thesis Research of the Far-East—教授の指導のもとに極東問題の研究, 調査。

Central Asia—Northwest China, Tibet, Mongolia, Russian Turkestan, Caucasus 等の個々の人口, 歴史, 宗教, 経済の講義。セミナー・コース。

上記コースはいずれも週2時間である。その他正規の授業のほかに、夏期学校があり8週間行なわれる。

以上がジョージタウン大学の語学教育の概要であるが、新語学教育方法と伝統的学習方法がうまく配分され、さらに地域教育も決しておろそかにしていない点は注目してよいであろう。

Ⅲ そ の 他

このように陸軍語学校を代表として、各大学の科学的教授法、充実した設備、豊富な語学教育器材等を考えてみるとアメリカの外国語教育のレベルは非常に高いように思われる。確かに特定の学校における教育レベルは高い。しかしこれは一部の優秀校のみであって、アメリカ全体の大学における一般水準は決して高いとはいえない。それは公立学校で外国語を既習している者がわずか14.2%に過ぎないため、大学に入って初めて外国語を学び始める学生が非常に多いことをみてもわかる。大学入学資格の1つとして外国語の既習を要求している4年制大学の数は全体の3割にすぎないといわれている。この事態を打破することが必要なことは一部教育学者のみならず、政府自体も十分認識すべきことであった。そしてしかるべき手段は着々と講じられているようである。

その1つのあらわれが、1958年議会で承認された国防

教育法 (National Defense Education Act) である。この法律の中の「言語開発」(Language Development) と名づけられる第6条601項(b)は、従来ほとんど教えられもせずまた未知でもあった外国語を習得しようとする意欲にもえた若いアメリカ人に対する給費研究制度を規定したものである。給費金をうける者は厳重なる資格審査の結果、自分の希望する言語を習うことができる。選択できる言語は下表のとおりである。さらに同じ601項(n)は高等外国語教育を実施している大学の研究機関を助成するために政府の財政援助を与えることも規定している。資格審査にパスした者はこれらの研究機関に入学を許可されるし、援助をうけていなくても、高等教育を実施しうる能力をもっていれば入学できる。短期コース、正規コース、どちらでも入学可能である。

給費金をうけるための条件のおもだったものは次のとおりである。(i) バチェラー、またはそれに準ずる資格を有する者、(ii) 教育終了後は、みずから学んだ言語を教えるために役立たせられるか、または国家の経済、文化、教育、科学の分野に貢献しなければならない。最初の年である1959年には171人の給費生が認められ、それぞれ Arabic, Chinese, Hindi-Urdu, Japanese, Portuguese, Russian 等の大学教師になるための研究をした。

選 択 言 語 名

Afrikaans	Gujerati	Lithuanian	Shona
Albanian	Hausa	Madurese	Sindhi
Amharic	*Hebrew (modern)	Malagasy	*Singhalese
**Arabic	**Hindi	Malayalam	Slovak
Armenian	*Hungarian	*Marathi	Slovene
Assamese	Ibo	Morogo	Sundanese
Azerbaijani	Icelandic	Mossi	*Swahili
*Bengali	Ilocano	Mongolian languages	Swedish
Berber languages	*Indonesian-Malay	Nepali	Tagalog
Bulgarian	**Japanese	Norwegian	*Tamil
*Burmese	Javanese	Oriya	*Telugu
Byelorussian	Kanarese	Panjabi	*Thai
Cambodian	Kashmiri	Pashtu	Tibetan
**Chinese	Kazak	*Persian	Tigrinya
Czech	Kazan-Turkic	*Polish	*Turkish
Danish	*Khalkha	**Portuguese	Twi
Dutch	*Korean	Quechua	Ukrainian
Estonian	Kpelle	Rajasthani	**Urdu
Ewe	Kurdish	Romanian	Uzbek
*Finnish	Laotian	**Russian	Vietnamese
Greek (modern)	Lettish	*Serbo-Croatian	Visayan
			Yoruba

(注) *印2つのついている言語は「言語発展」計画にもとづき最優先権が与えられ、*印1つの言語には第2の優先権が与えられる。必要に応じてこの分類は変更される。

なお1961年現在、政府補助をうけている大学の研究機関は別表のとおりである。それらは Language and Area Centers と呼ばれる。

さらに同じ第6条611項は小中学校の外国語教師を対象とする講習会の設置を規定している。これはすでに外国語教師の資格を有しながらもじゅうぶんな能力に欠けている者に「近代外国語教師の audio-lingual 能力を増進し、あわせて新しい教育方法、技術を紹介する」ことを目的とするものである。講習期間は6～8週間で初年度は720人、1960年には2040人、1961年には2622人の教師がこの講習をうけた。

〔参考資料〕

Army Language School, *Information Catalogue*,

Commandant U. S. Army Language School, California: Presidio of Monterey, 1956.

The Institute of Language and Linguistics, School of Foreign Service Bulletin 1957~1958, Georgetown University, 1957.

The Center for Applied Linguistics. The Linguistic Reporter, Vol. I, No. 4, 1959, Vol. II, No. 3, 1960, Vol. II, No. 5, 1960, Vol. III, No. 1, 1961.

Bulletin on the National Defense Education Act, Public Law 85~864, Title VI: No. 7, No. 8, 1959.

ロバート・A・ホール・Jr. 著、鳥居次好、興津透郎共訳、「記述言語学入門」、三省堂、昭和33年。

前田陽一、「アメリカ大学巡り」、大修館、昭和36年。

(アジア経済研究所広報出版部 山田達宏)

National Defense Language and Area Centers 1960~61

大 学 名	援 助 対 象 言 語	援 助 額
The University of Arizona	Chinese, Japanese	20,625
University of California	Hindi-Urdu, Persian, Telugu	47,009
	Ewe, Shona, Swahili	20,991
	Arabic, Berbar, Modern Hebrew, Persian, Turkish, Turkish, Kazak, Uzbek, Ethiopic, Amharic, Geez, Tigrinya	43,663
The University of Chicago	Chinese, Japanese	21,700
	Hindi-Urdu, Bengali	65,082
Columbia University	Chinese, Japanese, Korean	22,509
Cornell University	Hindi-Urdu	28,000
	Burmese, Indonesian-Malay, Thai, Vietnamese	50,000
	Chinese, Japanese	22,000
Duquesne University	Swahili	15,634
Harvard University	Chinese, Japanese, Korean	49,379
	Arabic, Hebrew, Persian, Turkish	52,577
University of Hawaii	Chinese, Japanese	21,232
	Indonesian, Thai	10,350
Howard University	Swahili, Tswana, Yoruba	8,091
State University of Iowa	Chinese	10,177
The Johns Hopkins University	Arabic	12,559
University of Kansas	Chinese	14,015
The University of Michigan	Chinese, Japanese	23,609
	Arabic, Persian, Turkish	36,590
Michigan State University	Ibo, Yoruba	25,759
University of Pennsylvania	Hindi-Urdu, Bengali, Marathi, Nepali, Tamil, Telugu	72,162
University of Pittsburgh	Chinese	17,934
Portland State College	Arabic, Hebrew, Persian, Turkish	25,019
Princeton University	Arabic, Persian, Turkish	51,462
University of Southern California	Chinese, Russian	26,030
Stanford University	Chinese, Japanese	40,360
The University of Texas	Hindi, Telugu	10,344
	Arabic	25,038
University of Utah	Arabic, Hebrew, Persian, Turkish	36,510
University of Washington	Chinese, Japanese, Russian, Mongolian, Tibetan	68,610
The University of Wisconsin	Hindi, Telugu	40,791
Yale University	Burmese, Vietnamese	30,685

(注) 上記言語のほか東欧諸国の言語についても援助をうけている大学もあるが、省略した。

(出所) Department of Health, Education, and Welfare Office of Education,